

# 大気環境学会誌

J Journal of  
apan  
S Society  
ociety  
for  
A Atmospheric  
tmospheric  
E Environment  
nvironment

---

2026

---

Vol. 61

---

No.2

---

大 気 環 境 学 会  
JAPAN SOCIETY FOR ATMOSPHERIC ENVIRONMENT

目 次

あおぞら

“ほんとの空”を守るために ..... 郡司 博道

研究室紹介

福岡大学理学部地球圏科学科 気圏物質科学研究室

総説

大気環境と人間の健康に関わる実験的研究と社会貢献

..... 奥田 知明〈令和7年度大気環境学会学術賞(斎藤潔賞)受賞者〉... 27

〔学生・若手研究者論文〕

研究論文(原著論文)

可搬型フーリエ変換分光計を用いた地上リモートセンシング計測による北海道内火力発電所の  
二酸化炭素排出量推定

..... 茅野 真聡, 塩見 慶, 大山 博史, 森野 勇, 田中 文基, 小野里 雅彦 ... 17

大気環境学会ニュース

第67回大気環境学会年会のお知らせ(第3報) ..... N11

大気環境学会賞受賞候補者の推薦について ..... N17

Asian Journal of Atmospheric Environment Vol. 19 Article number 23–28 2025,  
Vol. 20 Article number 1 2026 CONTENTS & ABSTRACT ..... N18

支部だより

関東支部 令和7年度関東支部 大気沈着部会講演会のお知らせ ..... N22

令和7年度関東支部総会・講演会・交流会のお知らせ ..... N22

近畿支部 生体影響部会講演会のお知らせ ..... N22

分科会・研究会だより

環境大気モニタリング分科会 第58回研究会のお知らせ ..... N23

委員会だより

編集委員会 研究論文の投稿のお願い ..... N24

「研究室・企業紹介」の原稿募集のお知らせ ..... N24

会員へのお知らせの掲載について ..... N24

J-STAGE への大気環境学会年会講演要旨集の掲載について ..... N24

論文賞選考委員会 論文賞の選考対象について ..... N24

関連学協会だより ..... N25

## CONTENTS

### [Blue Sky]

To Protect “the Real Sky” ..... Hiromichi Gunji

### [Review]

Experimental Research and Contribution to Society Regarding Atmospheric Environment and  
Human Health ..... Tomoaki Okuda ... 27

### [Original Paper]

Estimating Carbon Dioxide Emission from a Thermal Power Plant in Hokkaido by Ground-Based Remote  
Sensing Measurements with a Single Portable Fourier Transform Spectrometer  
..... Masato Chino, Kei Shiomi, Hirofumi Ohyama, Isamu Morino, Fumiki Tanaka, Masahiko Onosato ... 17

## —あおぞら—

### “ほんとの空”を守るために

全国環境研協議会会長  
福島県環境創造センター所長  
郡司 博道

このたびは大気環境学会誌の巻頭言「あおぞら」を執筆する機会をいただき、ありがとうございます。

さて、「あおぞら」というと、福島で生活する者としては、空に関わる一篇の詩が思い浮かびます。

高村光太郎「あどけない話」

(詩集『智恵子抄』より)

智恵子は東京に空が無いといふ、

ほんとの空が見たいといふ。

私は驚いて空を見る。

桜若葉の間に在るのは、

切つても切れない

むかしなじみのきれいな空だ。

どんよりけむる地平のほかしは

うすもも色の朝のしめりだ。

智恵子は遠くを見ながら言ふ。

阿多多羅山(あたたらやま)の山の上に

毎日出てゐる青い空が

智恵子のほんとの空だといふ。

あどけない空の話である。

この詩は、詩人でもあり彫刻家でもある高村光太郎が、妻の智恵子がふるさと福島県にある阿多多羅山(正式名称:安達太良山)の上に広がる清らかで澄み切った青空を想う様子を詠んだものです。智恵子の「ほんとの空」は単なる空ではなく、故郷への想い、失われた自然、そして私たちの心の中にあるべき純粹さや偏見のないまなざしを象徴しているともいわれていますが、今回は大気環境学会誌の巻頭ですので、あえて「単なる空」に目を向けてみたいと思います。

この詩が詠まれたのは1928年で、今から100年近く前ということになりますので、光太郎が言うように、東京でも十分きれいな空であったと思いますし、安達太良山の上にはさらに澄み切った青空が広がっていたことでしょう。

しかし、1950年代から始まる高度経済成長期には著しい経済発展とともに各地で深刻な環境汚染が大きな社会問題となり、1960年代後半から1970年代前半にかけて公害関連の

主要法令が制定されました。また、1971年には環境庁が発足し、様々な公害対策が講じられてきました。

現在、大気汚染物質のうち、二酸化窒素、浮遊粒子状物質、一酸化炭素等は環境基準をおおむね達成していますが、光化学オキシダントは依然として達成率が低く、微小粒子状物質(PM<sub>2.5</sub>)は環境基準をおおむね達成しているものの健康リスクの懸念があるため、これらの2物質については、科学的知見や気候変動の影響等を反映するよう、環境基準の見直しに向け検討が行われています。

また、2025年の夏(6~8月)の平均気温は平年より2.36°C高く記録的な猛暑となり、3年連続で1898年の統計開始以降の最高記録を更新しました<sup>1)</sup>が、その原因の一つには温室効果ガスによる気候変動(地球温暖化)の影響が考えられています。

さらに、光化学オキシダントやPM<sub>2.5</sub>の一部は、窒素酸化物と揮発性有機化合物等が大気中で光化学反応を起こして生成しますが、地球温暖化が進み気温が高くなるとその光化学反応が促進され、光化学オキシダント等の濃度が上昇する可能性があり、また気候変動により偏西風等の大気循環やそれに伴う越境汚染が変化する可能性がある指摘されています。

このような環境問題に対応するためには、大気汚染物質等に関する調査を継続して行い、大気汚染の経年変化や地域的な特性を把握していくことが必要です。

このため、全国環境研協議会では、1991年から酸性雨広域大気汚染調査研究部会を通じて、酸性雨や広域大気汚染に関する全国規模の調査研究とデータ集積・分析を行うほか、国立環境研究所と光化学オキシダント等に関する共同研究を実施しており、これらのデータは、環境省や国立環境研究所等の協力を受けて、一般公開するとともに貴学会等でも発表しています。

今後とも「ほんとの空」や豊かな環境を未来へ継承するため、調査研究に取り組んで参りますので、大気環境学会の皆様の御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

#### 引用文献

- 1) 気象庁: 報道発表資料, <https://www.jma.go.jp/jma/press/2509/01a/honshi.pdf>

## 研究室紹介



# 福岡大学理学部地球圏科学科 気圏物質科学研究室

### ● 地球圏科学科・気圏物質科学研究室

「地球圏科学」とは、地球を取り巻く大気、海洋、岩石・土壌、生命といった多様な自然現象を科学的に解明する学問です。地球圏科学科では、物理学・化学・生物学・地学を基礎に、地球環境や生命現象の仕組みを探究する、国内でも類を見ないユニークな学科です。

当学科の気圏物質科学研究室では、4名の教員（林政彦、原圭一郎、高島久洋、白石浩一）を中心に、大気科学、大気化学、エアロゾル物理化学に関する研究を観測主体で行っています。ライダー等のリモートセンシング、SEM-EDXによる粒子分析、飛翔体を用いた上空大気のサンプリングなど手法は多岐にわたり、対象領域も福岡のみならず、南極・北極から熱帯域まで地球規模でカバーしています。

地球圏科学科 <https://www.sci.fukuoka-u.ac.jp/earth/>

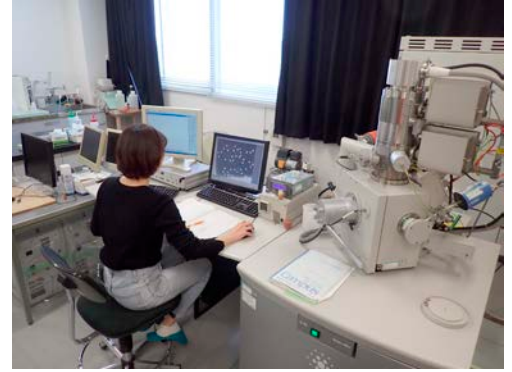
### ● 福岡から診る大気環境研究所

気圏物質科学研究室のメンバーを中心に、学内のプロジェクトとして、福岡大学産学官共同機関研究所「福岡から診る大気環境研究所」を立ち上げています。学外の大学・研究機関・企業と連携し、PM<sub>2.5</sub>や大気汚染ガスの組成・動態を解明するための研究を実施しています。総合的な大気環境観測に加え、医学部・理学部の連携による健康影響の基礎研究も進めています。

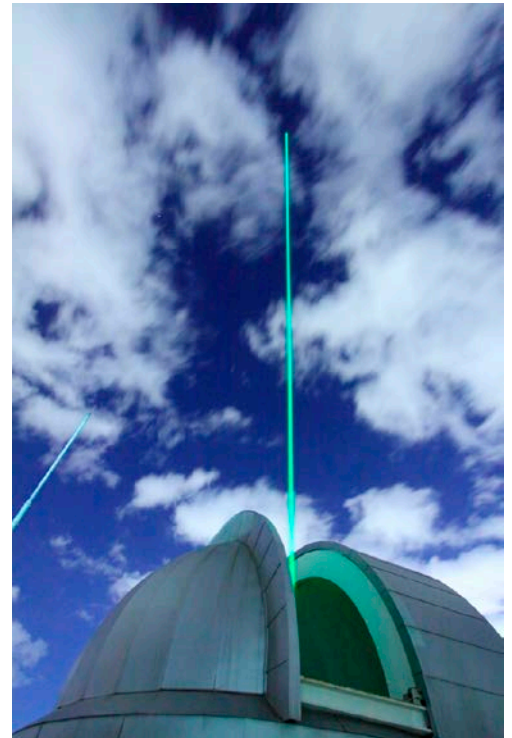
日本の大気質は、中国・韓国からの越境輸送と、日本各地域の人間活動の両面から強い影響を受けています。福岡市は日本西端に位置する大都市ですが、大気汚染源が都市中心部に集中しています。そのため、越境輸送と日本の都市由来の汚染を明確に切り分けられるという、日本でも類をみない観測適地となっています。その福岡に国内有数の観測拠点を構築して研究を行ってきました（詳細は例えば『エアロゾル研究』レビューペーパー：高島ら、2024を参照）。(文責：高島)



福岡大学 A 棟屋上（海拔約 55 m）では、多数のリモートセンシング装置・その場観測装置が設置され、大気観測が行われている。写真はドップラーライダー（福岡平野の風速・風向を 3 次元計測）。



サンプルしたエアロゾルの組成分析を行っている。写真は電子顕微鏡 (SEM-EDX) によるエアロゾル個別粒子の観察・分析。



リモートセンシング観測装置も充実しており、ラマンライダー、水蒸気ライダー、MAX-DOAS、Pandora 等の装置による大気観測が行われている。写真はラマンライダーによる成層圏エアロゾル観測写真。

◆◆◆◆◆大気環境学会ニュース◆◆◆◆◆

第67回大気環境学会年会のお知らせ (第3報)

第67回大気環境学会年会および併設の環境機器展を下記のとおり開催いたします。多数の会員のご参加をお待ちしております。

会期: 2026年9月16日(水)～18日(金)  
 会場: 東洋大学川越キャンパス(埼玉県川越市鯨井2100)  
 年会ウェブサイト: <https://sites.google.com/view/jsac67toyo-cess/>

【注意点】

- ・ 前回年会と同様、発表申込み・要旨提出にはGoogle Formsを、参加登録・支払いにはPeatixを利用します。詳細は年会ウェブサイトですぐお知らせします。
- ・ 支払方法の関係で、年会当日の会場での現金支払いは今年も受け付けません。
- ・ 早期払込(期限: 8月7日)をご利用いただきますと参加費に割引料金が適用されます。
- ・ **参加費には講演要旨集(PDF)代が含まれます。**事前参加登録者には年会ウェブサイトからPDFファイルをダウンロードできるようにします。
- ・ 法人会員Bおよび協賛会員には年会後に要旨集PDFデータのパスワードを送付します。
- ・ 年会開催前に発行される学会誌にプログラムを掲載します。
- ・ 参加申込みには会員番号が必要です。事前にご確認をお願いします。
- ・ 前年に続き今回も「保育支援」を実施いたします。年会開催時の各種保育サービス利用の補助、および現地保育(年会会場に保育室を設置)を予定しています。詳細は年会ウェブサイトに掲載予定です。
- ・ 対面開催を予定しておりますが、天災地変、その他の不可抗力の事由により、年会の開催中止、延期、あるいは開催方法の変更もあり得ます。これらの場合には年会ウェブサイト等を通じて詳細をご連絡いたします。

1. 研究発表申込および年会参加申込の流れ【詳細は年会ウェブサイトおよび年会のお知らせ第4報をご覧ください】

流れ	期限など
1. 研究発表の申込: 年会ウェブサイト「一般研究発表」のページより指示に従って申込む。	期限: 5月29日(金) ※プログラム編成の都合上、期限の延長はいたしませんのでご注意ください。
2. 「一般研究発表」のページより指示に従って講演要旨原稿を提出。	期限: 6月30日(火)
3. 年会ウェブサイトから「参加登録」ページへアクセスしてPeatixより参加登録し、参加費、発表申込金等を払い込む。	早期払込(割引) 期限: 8月7日(金) 8月8日(土)以降は通常料金となります。
4. 当日 【事前登録者】受付でプログラム集等を受け取る。 【当日登録者】受付でPeatixより当日登録を行い、プログラム集等を受け取る。当日の現金の授受は行いません。	

2. プログラム概要(予定)

日程	午前	午後	夕方
9月16日(水)	口頭発表	ポスター発表、特別集会	分科会
9月17日(木)	口頭発表、ポスター発表、特別集会	総会、受賞記念講演、シンポジウム	意見交換会
9月18日(金)	口頭発表、特別集会	口頭発表、特別集会、公開シンポジウム	

**期間中は全日、環境機器展を開催します。**様々な最新機器が展示されますので情報収集などの機会としてご参加ください。  
**関連の技術セミナー(弁当付き、定員あり)も予定しています。**

### 3. 年会参加登録

#### 3.1 年会参加登録方法

年会ウェブサイトから、各種フォームを利用しての参加登録となります。詳細は年会ウェブサイト「参加登録」をご参照ください。

#### 3.2 年会参加費および早期払込割引(期限8月7日(金))

できるだけ**早期払込(期限: 8月7日)**をお願いします。期限以降は通常料金となりますのでご注意ください。また、参加費には**プログラム集(冊子体)および講演要旨集(PDF)代が含まれています**。年会ウェブサイトの案内に従って、クレジットカード等でお支払いください。払込み後の返金はできません。

参加区分	参加費		意見交換会費 <sup>#</sup>	
	早期払込	8月8日以降	早期払込	8月8日以降
正会員	¥7,500	¥10,000	¥10,000	¥12,000
賛助会員	¥7,500/人	¥10,000/人	¥10,000	¥12,000
法人会員B	¥7,500/人	¥10,000/人	¥10,000	¥12,000
学生会員	¥3,500	¥5,000	¥5,000	¥6,000
法人会員A	¥10,000	¥12,000	¥10,000	¥12,000
名誉会員	招待		¥10,000	¥12,000
非会員	¥10,000	¥12,000	¥10,000	¥12,000
ジュニア聴講生*	¥0	¥0	¥5,000	¥6,000

#意見交換会は定員に達した段階で締め切らせていただきます。

・定員に達していない場合、当日の参加も可能です。ただし、会場受付にてPeatixを利用したクレジットカード払いのみ受け付けます。現金は受け付けません。

・意見交換会の会場: JR川越駅周辺を予定しています。詳細は年会ウェブサイトに掲載します。

\*ジュニア聴講生は高校生と大学の学部学生が聴講のみで参加可能な参加区分です。学年は問いません。身近な学生にも幅広く呼びかけていただくことを期待します。ただし、学会発表する場合には学生会員として入会し、学生会員の参加費をお支払いください。

#### 3.3 講演要旨集(PDFファイル)について

参加登録者は、年会ウェブサイトより事前に講演要旨集のPDFファイルを閲覧・ダウンロードできるようにします。

#### 3.4 プログラム集について

プログラム集(冊子体)は当日配布とし、事前送付はいたしません。講演要旨集(冊子体)は事前にお申込みいただいた購入希望者のみに配付します。講演要旨集(冊子体)の購入をご希望の場合は、3.5をご参照ください。

#### 3.5 講演要旨集の販売

講演要旨集(冊子体)は1冊5,000円(送料込み)で承ります。年会ウェブサイトの案内に従い、Peatixを利用したクレジットカード払いにてお支払いください。発送申込み期限ま

でにお申込みされた場合は、冊子体を発送いたします。発送申込み期限は8月中旬、発送は9月上旬以降を予定しておりますが、詳しくは年会ウェブサイトに掲載いたします。発送申込み期限後、または会場でお申込みされた場合は、会場でお渡しになります。ただし、当日会場受付におけるお申込みであってもPeatixを利用したクレジットカード払いのみとなり、現金によるお支払いは受け付けません。

講演要旨集(冊子体)にはPDFデータは付属しておりません。また、年会に参加されずにPDF版の講演要旨集の購入を希望される方も、年会ウェブサイトの案内に従ってPeatixよりお申込み・お支払いください。

#### 3.6 個人情報の取り扱いについて

参加登録者から取得した個人情報は、年会の運営に係わる適正な利用範囲(事務局からの問い合わせ、補助金申請のための名簿作成等)に限り使用し、その他の用途でご本人の同意なく第三者に提供することはありません。

### 4. 一般研究発表の申込み

#### 4.1 発表形式

発表形式は口頭発表とポスター発表の2種類があります。なお、口頭発表の枠およびポスター数に制約があります。そのため、発表形式の変更をお願いさせていただくことなど、お申込みいただいた内容が全てご要望通りにならない可能性があります。

**【学生・若手研究者優秀発表賞について】**学生・若手研究者の希望者を対象に、優れた口頭発表・ポスター発表を「学生・若手研究者優秀発表賞」として表彰する予定です。なお、学生・若手研究者優秀発表賞のエントリー資格は、学生または博士号を取得していない若手研究者で、正会員・学生会員・法人会員および賛助会員所属の方のみとなります(申込み時には入会申請中でも可)。また、学生・若手研究者優秀発表賞への審査希望は、1名につき口頭発表もしくはポスター発表のどちらか1件のみとし、講演要旨提出時にアピールポイントなどを入力していただく予定です。詳細は、年会ウェブサイトおよび学会誌の続報にて随時お知らせします。

#### 4.2 申込み方法

年会ウェブサイトからの申込みとします。申込みと同時に、発表申込金(演題1題につき3,000円)を年会参加費とともにPeatixを利用したクレジットカード払いにてお支払いください。なお、特別集会および分科会の発表申込金は不要です。

申込みの際に入力していただく項目および発表部門は、「6. 研究発表の申込み時の入力項目および発表部門」を参照してください。

#### 4.3 申込み時の注意事項

- 筆頭発表者および演者は会員に限ります(共同発表

者、および特別集会や分科会の演者は非会員でも構いません。未入会の方は、大気環境学会ウェブサイト (<http://www.jsae-net.org>) で入会手続きを行ってから申し込んでください。

- b. 同一演者による一般研究発表は、3題以内とします。複数の発表がある場合には、希望する発表順序を必ず入力してください。なお、特別集会、分科会などはこの数に含みません。
- c. プログラム編成の都合により、発表部門や発表形式、発表件数を変更させていただくことがあります。
- d. 演題名は修正していただくことがあります。
- e. 発表申込みは、共同発表者全員の了承を必ず得てから行ってください。なお、発表内容に問題があると判断された場合には申込みを受理しません。

#### 4.4 発表申込み期限および発表申込金

- a. 発表申込み期限：2026年5月29日（金）
- b. プログラム編成の都合上、申込み期限は延長いたしません。
- c. 年会への参加登録後に発表申込みをおこない、年会参加費とともに発表申込金（演題1題につき3,000円）をお支払いください。払込み後の返金はできません。
- d. 発表申込金と参加費の支払いは同じタイミングです。参加費支払いの前に発表申込金を支払う必要はありません。

#### 4.5 講演要旨原稿の提出

提出期限：2026年6月30日（火）

提出方法：年会ウェブサイト「一般研究発表の申込み」のページより指示に従ってご提出ください。

- a. 一般研究発表の要旨は、年会ウェブサイトでのみ原稿を受付けます。
- b. 原稿の提出は期限厳守をお願いします。
- c. 原稿作成の詳細については後述の「講演要旨原稿作成の手引き」をご覧ください。
- d. 発表申込み時の内容（タイトル・発表者等）と要旨の内容が異なる場合は要旨の内容を優先しますが、プログラム集等への更新内容の反映は保証いたしません。各自にて必ず内容をご確認ください。
- e. 大気環境学会年会講演要旨集に掲載された講演要旨の著作権は、(公社)大気環境学会著作権ポリシーに基づき、公益社団法人大気環境学会に属します。また、すべての要旨がJ-STAGEに掲載される予定です。これらを了承の上ご提出ください。

#### 4.6 発表に関する注意事項

- a. 口頭発表では、WindowsのMicrosoft PowerPointによるプレゼンテーションを予定しています。ソフト

ウェアのバージョンやポスターの掲示サイズなど、発表方法の詳細は、年会ウェブサイトおよび続報でお知らせします。

- b. 会場での発表資料等の配付は、各人の責任で行ってください。

#### 5. 特別集会・分科会企画の公募

特別集会と分科会は一つのカテゴリーとして、企画を公募します。開催を希望される場合は、年会ウェブサイトから入手できる様式に従って、下記の「5.1 特別集会・分科会概要」に示す内容をメールで以下のアドレスまでお送りください。会場数に限りがあるため、複数の分科会合同での開催もご検討ください。

申込み期限：2026年5月8日（金）

申込み先：第67回大気環境学会年会実行委員会

Email: [jsae67toyo.cess@gmail.com](mailto:jsae67toyo.cess@gmail.com)

#### 5.1 特別集会・分科会概要

- a. タイトル（特別集会、分科会の別を入力のこと）  
分科会のテーマに関係が深い内容は、特別集会ではなく分科会での申請をお願いいたします。
- b. 趣旨・内容（200字程度）
- c. 企画責任者の氏名、所属、電話番号、メールアドレス
- d. 世話人と座長の氏名、所属
- e. 講演者の氏名、所属、メールアドレス、講演タイトル
- f. 希望日時と予想されるおおよその参加者数
- g. 講演要旨は著作権が大気環境学会に属すること、また、J-STAGEにて後日公開されることを企画責任者および講演者が了承しているか

#### 5.2 企画の採否と内容の決定、演題・要旨の提出

年会実行委員会にて日程・プログラム編成上の都合を勘案して企画の採否を決定し、企画責任者へ通知します。講演要旨原稿は、企画責任者が取りまとめ、実行委員会宛てにお送りください。なお、特別集会、分科会の演題については発表申込金は不要です。

#### 6. 研究発表の申込み時の入力項目および発表部門

##### 6.1 入力項目

一般研究発表を申込み際に入力いただく項目は以下を予定しています。なお、今後項目が変更される可能性がありますので、詳しくは年会ウェブサイトおよび続報をご確認ください。

##### 【筆頭発表者情報】

- a. 氏名
- b. 会員番号
- c. 会員種別：正会員、学生会員、法人会員B、賛助会員、名誉会員

- d. 所属機関名
- e. 電子メールアドレス
- f. 電話番号

**【発表者情報】**

- a. 所属機関名
- b. 共同発表者の氏名
- c. 講演要旨掲載順

**【発表形式・部門】**

- a. 希望発表形式：口頭発表またはポスター発表を選択
- b. 審査希望の有無：学生・若手研究者優秀発表賞の審査希望の有無を入力してください。
- c. 希望発表分類：発表部門・分類一覧の中から、発表を希望する部門・分類を第1希望は必ず、必要に応じて第3希望まで選択してください。
- d. 関連発表順序：複数の関連した内容の発表を続けて行いたい場合は、備考欄に、関連発表の発表者氏名と演題名を入力し、ご自分の発表との順序を入力してください。

3 影響	3-1 植物影響 3-2 材料・文化財影響 3-3 臭気 3-4 動物影響・毒性評価 3-5 疫学・リスク評価
4 発生源	4-1 移動発生源 4-2 固定発生源 4-3 排出インベントリ 4-4 排出規制・抑制技術・コベネフィット
5 輸送・反応・沈着	5-1 輸送・拡散 5-2 生成・反応 5-3 沈着
6 手法開発	6-1 分析・測定・観測手法 6-2 計測機器・ローコストセンサー 6-3 数値解析・モデリング 6-4 人工知能 (AI)・機械学習
7 気候変動	7-1 温室効果ガス 7-2 影響評価・予測 7-3 緩和策・適応策
8 その他	8-1 環境社会科学・環境学習 8-2 その他

**【演題名・講演要旨】**

- a. 演題名
- b. 発表分類のための要旨：研究概要を100~200字程度で記入（詳細な結果の入力は不要です。）
- c. 発表分類のためのキーワード（3~5個）
- d. 講演要旨（研究発表の申込み時は不要ですが、6月30日までに提出してください。）

**6.2 発表部門・分類一覧**

1 大気汚染物質	1-1 光化学オキシダント 1-2 VOC 1-3 粒子状物質 1-4 酸性雨 1-5 放射性物質 1-6 有害化学物質 1-7 その他
2 環境動態	2-1 室内環境 2-2 沿道環境 2-3 都市・地域 2-4 東アジア 2-5 地球環境

**7. 問い合わせ先など**

年会に関する情報は、逐次「大気環境学会誌」の大気環境学会ニュース欄でお知らせするとともに、最新情報は随時年会ウェブサイトに掲載します。不明な点については下記までお問い合わせください。

**【年会ウェブサイトアドレス】**

<https://sites.google.com/view/jsae67toyo-cess/>

**【第67回大気環境学会年会に関するお問い合わせ先】**

第67回大気環境学会年会実行委員会

Email: [jsae67toyo.cess@gmail.com](mailto:jsae67toyo.cess@gmail.com)

**8. 最後に**

口頭発表の枠に制約があります。そのため、発表件数を制限させていただくこと、口頭発表でエントリーした方にポスター発表への変更をお願いさせていただくことなど、申込みいただいた内容が全てご要望通りにならない可能性があります。上記に加えて、特別集会・分科会の開催日や会場（サイズ）などについて、実行委員会から調整のご相談をさせていただく可能性があることを予めご了承ください。

また、会場には駐車スペースがございませんので、公共交通機関でのご参加をお願いいたします。会場へのアクセスにつきましては、年会ウェブサイトおよび続報をご確認ください。

## 講演要旨原稿作成の手引き

### 1. はじめに

年会ウェブサイト内の『一般研究発表申込み』にある原稿作成用テンプレート (Word形式) をダウンロードし、要旨を記載しPDFファイルを作成してください。不都合がある場合は、お問い合わせ先 (jsae67toyo.cess@gmail.com) までご連絡ください。

### 2. 本文作成方法

#### 2.1 本文作成

- ①年会ウェブサイトより『一般研究発表申込み／講演要旨原稿作成の手引き』へアクセスしてください。
- ②「原稿作成用テンプレート」をクリックすると、テンプレートファイルがダウンロードできます。
- ③テンプレートをダウンロードできない場合は、下記を参考に作成してください。
  - ・上に25 mm、下に20 mm、左右に20 mmずつ余白をとり、この範囲内に原稿を横書きで書いてください。
  - ・所定の位置に講演題目、名前、所属を記入してください。発表者の所属が異なる場合には、名前と所属の右肩に上付きで1) や2) の印をつけて、対応がわかるようにしてください。
  - ・演者には名前の前に○印をつけてください。
  - ・フォントは講演題目はゴシック12ポイント、講演

題目以外は明朝10ポイントにしてください。

- ④ページの上限は、一般研究発表1ページ、特別集会4ページ、分科会2ページとします。特別集会、分科会の詳細については各企画責任者に問い合わせてください。
- ⑤原稿をPDFファイルに変換してください。
  - ・Adobe Acrobat等でPDFファイルに変換してください。
  - ・PDF変換の際には、フォントの埋め込みを行ってください。
  - ・必ずPDFファイルを出力して、文字化け、画像の乱れ等がないかご自身で確かめてください。事務局では内容のチェックをしません。画像の乱れや文字化けなどがそのまま講演要旨集に掲載されますのでご注意ください。

#### 2.2 原稿提出・修正

要旨のアップロード方法は、後日年会ウェブサイトおよび続報にてお知らせいたします。なお、発表申込み期限である5月29日以降は、プログラム編成上、要旨原稿の入れ替え以外の演題名や発表者名等の変更は原則として受け付けませんのでご注意ください。詳しくは年会ウェブサイト (<https://sites.google.com/view/jsae67toyo-cess/>) をご確認ください。

## ◆◆◆◆◆大気環境学会ニュース◆◆◆◆◆

## 第67回大気環境学会年会「環境機器展」のご案内

公益社団法人大気環境学会では、2026年9月16日（水）から9月18日（金）の3日間、東洋大学川越キャンパスにて第67回大気環境学会年会を開催致します。例年通り、年会に併設して『環境機器展』を開催します。毎年400名を超える大気環境分野の研究者が集う本年会は、貴重な情報交換の場ともなっております。年会と併行しまして、貴社製品の展示や技術、サービス等をご紹介いただく環境機器展ならびに技術セミナーを同会場にて行う予定です。

つきましては、貴社の製品・技術・サービスを年会参加者に広くご紹介いただくことはもとより、参加者との情報交換等のために、この機会に奮ってご出展くださいますようご案内申し上げます。

あわせて、プログラム集（冊子体）と講演要旨集（PDF）への広告や、年会ウェブサイトへのバナー広告の掲載も予定しておりますので、皆様方のご支援、ご協力、何卒、宜しく願い申し上げます。出展特典の一例を以下に紹介いたします；

- (1) 一般講演等にご参加いただける年会参加証、プログラム集（冊子体）、講演要旨集（PDF）の進呈
- (2) 技術セミナーでの発表割引、バナー広告への掲載割引
- (3) 学会員の研究ニーズ情報ご提供

『環境機器展』への出展のお申込みは5月29日（金）までを予定しております。詳細は年会ウェブサイト (<https://sites.google.com/view/jsae67toyo-cess/>) をご確認ください。なお、天災地変、その他の不可抗力の事由により、年会の開催中止、延期、あるいは開催方法の変更もあり得ます。これらの場合には改めて詳細をご連絡いたします。

## ◆◆◆◆◆大気環境学会ニュース◆◆◆◆◆

## 大気環境学会賞受賞候補者の推薦について

来る2026年9月に「第67回大気環境学会年会」で開催される「令和8年度大気環境学会総会」において、大気環境学会賞の表彰を行いますので、「大気環境学会の表彰に関する規定」(平成27年3月20日改定:学会ホームページに掲載)をご参照のうえ、受賞候補者の推薦を下記要領でお願いします。

## 記

## 1. 表彰の対象となる業績

- ・学術賞(斎藤潔賞):国内外において学術上ならびに社会的に顕著な業績をあげた人
- ・功労賞(鈴木武夫賞):本学会または地域・社会に対して多大な業績をあげた人(年齢55歳以上)
- ・進歩賞:学術上優れた業績をあげた若手研究者(申請年の4月1日現在で年齢40歳以下)
- ・技術賞:技術的に優れた業績をあげたか、或いは技術の普及に著しい功績をあげた人

## 2. 推薦に必要な書類等

- ①推薦状(推薦者の所属、氏名、生年月日の記載ならびに署名または捺印のあるもの)
- ②被推薦者の氏名、生年月日、所属、略歴
- ③推薦理由書(2,000字程度)ならびにその概要(200字程度)
- ④業績資料 学術賞及び進歩賞については、主たる推薦理由に相当する論文の目録(大気環境学会誌並びにAsian Journal for Atmospheric Environment(AJAE)の原著または総説を含む)、および主要論文の別刷(主要論文を3編、PDFファイルでの提出を推奨)。  
技術賞に関しては、業績を証明するための資料、書類等、例えば「行政報告書」、「技術報告書」、「特許」、「製品検査報告書」、「著書」等。  
功労賞に関しては、業績についての具体的な事実と成果に関する説明。
- ⑤推薦者は2名以上を必要とする。
- ⑥②、③、④の業績目録については電子データも別途に提出を必要とする。

## 3. 送付先および期限

送付先:〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5  
(公社)大気環境学会事務局 大気環境学会賞選考委員会  
TEL: 03-6824-9392 FAX: 03-5227-8631  
E-mail: jsae-post@as.bunken.co.jp

締切:2026年5月29日(金) 必着

## 4. 同一名義人による推薦は、表彰の対象となる種類毎に、原則として毎年1件とする。

備考 これまでの学会賞の受賞者の記録は、学会ホームページに掲載されています。

## ◆◆◆◆◆大気環境学会ニュース◆◆◆◆◆

## Asian Journal of Atmospheric Environment

Vol. 19 Article number 23–28 2025, Vol. 20 Article number 1 2026

## CONTENTS &amp; ABSTRACT

Vol. 19, Article number: 23

Research Article

**Catalytic role of atmospheric constituents in the formation of 6PPD-Quinone in a Korean Metropolitan Region**Hajeong Jeon, Dong-Hoon Ko, Myoungki Song, Min-Suk Bae\* .....<https://link.springer.com/article/10.1007/s44273-025-00075-y>**ABSTRACT**

N-(1,3-dimethylbutyl)-N'-phenyl-p-phenylenediamine quinone (6PPD-quinone) is an oxidation product of the tire antioxidant 6PPD and has recently emerged as a toxic environmental contaminant. Although the transformation of 6PPD to 6PPD-quinone through ozone has been documented, the influence of other atmospheric constituents as catalysts remains inadequately characterized. This study assessed whether specific airborne elements promote the conversion of 6PPD to 6PPD-quinone. From 7 to 26 June 2024, total suspended particles were sampled at the National Institute of Environmental Research in Incheon, Republic of Korea. The elemental composition of collected samples was determined using energy-dispersive X-ray fluorescence, while 6PPD-quinone levels were measured by liquid chromatography–tandem mass spectrometry. Particle number

and volume concentrations were recorded in parallel with a scanning mobility particle sizer and an optical particle sizer, along with real-time detection of black carbon, nitrogen dioxide, and ozone. Mean daytime 6PPD-quinone concentrations were measured at  $0.12 \pm 0.08 \text{ ng m}^{-3}$ , displaying significant temporal variability ( $0.001\text{--}0.519 \text{ ng m}^{-3}$ ). Multivariate regression analysis identified bromine and vanadium as principal predictors of 6PPD-quinone abundance. Notably, strong correlations with particle characteristics indicated that these elements may act not only as markers of emissions but also as catalysts facilitating atmospheric transformation of 6PPD. This study offers the first mechanistic insight in Korea into the contribution of traffic-associated elements to 6PPD-quinone formation, which has important implications for urban air quality management and the assessment of ecological risks.

Vol. 19, Article number: 24

Research Article

**A comparative study of the UV index between OMI and ground-based measurements in Nepal**Umakant L. Karna\*, Khem N. Poudyal, Babu R. Tiwari, Binod K. Bhattarai .....<https://link.springer.com/article/10.1007/s44273-025-00072-1>**ABSTRACT**

The study on solar ultraviolet radiation (UVR) is essential for understanding the solar status of any location, which enables the determination of the level of exposure to solar UV radiation and the necessary precautions to be taken at that location. The measurement of solar UV radiation and its validation are increasingly prevalent worldwide, using various ground-based observations and satellite estimates. This paper compares the Ozone Monitoring Instrument (OMI)/Aura satellite solar ultraviolet index (UVI) with the ground-based UVI measurements at Biratnagar, Pokhara, Kathmandu, and Lukla in Nepal using data from 2009 to

2012. Trend analysis of UVI using moving averages, a box plot of overpass UVI and Total Ozone Column (TOC) to analyze their trends, and a scatter plot for comparison of OMI overpass UVI with ground-based UVI. Statistical tools were used to compare the datasets for UVI in all-sky conditions. The results show that satellite estimates tended to overestimate ground-based UVI levels, with a mean bias, relative bias, MAPE, RMSE, correlation coefficient, and standard deviation of error corresponding to 0.92, 1.9, 28.44, 1.6, 0.69, and 1.44 for UVI, respectively. The result also shows that the altitude effect is found to be (6.5–8.8) %/km approximately.

Vol. 19, Article number: 25

Correction

**Correction: Microplastics and health hazards: gastrointestinal risk assessment across a multi-species perspective**

Shiv Basant Kumar, Jey Kumar Pachiyappan, Sudharsanavasan Chandrasekar, Veera Venkata Satyanarayana Reddy Karri,

Praveen Thaggikuppe Krishnamurthy, Jawahar Natarajan, Thava Palanisami\*, Gowthamarajan Kuppusamy\*

.....<https://link.springer.com/article/10.1007/s44273-025-00076-x>**ABSTRACT**Correction: *Asian J Atmospheric Environment* 19: 17 (2025)<https://doi.org/10.1007/s44273-025-00068-x>

Following publication of the original article [1], the authors identified an error in the author name of Thava Palanisami.

The incorrect author name is: Thava Palaniami.

The correct author name is: Thava Palanisami.

The author group has been updated above and the original article [1] has been corrected.

**References**

1. Kumar, et al. (2025). Microplastics and health hazards: gastrointestinal risk assessment across a multi species perspective. *Asian Journal of Atmospheric Environment*, 19:17. <https://doi.org/10.1007/s44273-025-00068-x>

Vol. 19, Article number: 26

Research Article

**Emissions of volatile organic compounds from a commercial hen shed in Japan**

Nobuyuki Tanaka\*, Nanami Hanari, Ayumi Takahara, Akane Miyazaki, Genki Katata, Hisao Kuroda

.....<https://link.springer.com/article/10.1007/s44273-025-00078-9>**ABSTRACT**

To better understand the actual status of volatile organic compound (VOC) emissions from the livestock industry in Japan, air samples were collected near the exhaust vents of a windowless commercial layer hen facility located in the northern Kanto region. Environmental parameters including temperature, relative humidity, and wind speed at the ventilation outlets were also recorded. The average VOC concentration inside the shed ranged from 151 to 448  $\mu\text{g m}^{-3}$ , consistent with those observed in educational hen sheds. Volatile fatty acids (VFAs) were the most abundant VOCs

across all months, followed by ketones and aldehydes, together accounting for 72–91% of total VOCs. Regarding atmospheric impacts, VFAs contributed most to hydroxyl radical reactivity (OHR), while aldehydes dominated ozone formation potential (OFP). VOC emission rates (ERs) ranged from 271 to 1240  $\mu\text{g h}^{-1} \text{kg}^{-1}$ , with the highest value recorded in June, and were positively correlated with in-shed temperature. The estimated annual VOC emissions from commercial layer hen facilities across Japan totaled approximately 455 tons, representing ~0.1% of the country's anthropogenic VOC emissions.

**【和訳情報】****我が国の商用採卵鶏舎から排出される揮発性有機化合物**

田中 伸幸<sup>1</sup>、羽成 七海<sup>2</sup>、高原 歩美<sup>2</sup>、宮崎 あかね<sup>2</sup>、堅田 元喜<sup>3</sup>、黒田 久雄<sup>4</sup> (<sup>1</sup>電力中央研究所、<sup>2</sup>日本女子大学、<sup>3</sup>キャノングローバル戦略研究所、<sup>4</sup>茨城大学)

日本の畜産業における揮発性有機化合物 (VOC) 排出の実態をより深く理解するため、関東地方北部に位置するウインドウレス商業用採卵鶏舎の排気口付近で大気試料を採取した。換気口における気温、相対湿度、風速などの環境パラメータも記録した。鶏舎内の平均 VOC 濃度は 151–448  $\mu\text{g m}^{-3}$  の範囲であり、教育用鶏舎で観測された値と一致した。揮発性脂肪酸 (VFAs) は全月を通じて最も支配的な VOC であり、次いでケトン類とアルデヒド類が続き、これら 3 種で総 VOC

の 72–91% を占めた。大気への影響としては、VFAs がヒドロキシルラジカル反応性 (OHR) に最も寄与し、アルデヒド類がオゾン生成ポテンシャル (OFP) を支配した。VOC 排出速度 (ER) は 271–1240  $\mu\text{g h}^{-1} \text{kg}^{-1}$  の範囲で、最高値は 6 月に記録され、鶏舎内温度と正の相関を示した。全国の商業用採卵鶏施設からの年間 VOC 排出量は約 455 トンと推定され、国内の人為起源 VOC 排出量の約 0.1% を占めると推計された。

Vol. 19, Article number: 27

Research Article

**Dispersion of PM<sub>2.5</sub> particles emitted by the waste dump fire in the city of Guanajuato, Mexico**

Adrián Zamorategui-Molina\*, Gilberto Álvarez Guzmán, Marcos Irineo Esquivel Longoria, Juan Carlos Baltazar Vera,

Alma Hortensia Serafin Muñoz ..... <https://link.springer.com/article/10.1007/s44273-025-00070-3>**ABSTRACT**

Air pollution is the most significant environmental health risk, and the chemical composition of PM<sub>2.5</sub> has the greatest impact on its effects on human health. While PM<sub>2.5</sub> pollution has been widely studied, little attention has been given to the role of landfill fires in shaping PM<sub>2.5</sub> composition and dispersion in medium-sized cities with complex topographies. This study integrates the physical and chemical characterization of PM<sub>2.5</sub> (potassium, chlorine, and irregular morphology) with AERMOD dispersion modeling to assess exposure during a landfill fire in Guanajuato, Mexico. The maximum monthly average concentration was recorded in May at 22.4 µg m<sup>-3</sup>, while the 24-h average exceeded the

allowable limit of 33 µg m<sup>-3</sup> during the days of the landfill fire, reaching 50 µg m<sup>-3</sup>. The annual average concentration (13.4 µg m<sup>-3</sup>) also exceeded the 10 µg m<sup>-3</sup> guideline. AERMOD simulations reproduced observed patterns, confirming northeastward dispersion toward the city hillside. Based on the 12-h moving average during the fire (45 µg m<sup>-3</sup>), residents were exposed to poor air quality and elevated risks of respiratory and cardiovascular diseases, stroke, and lung cancer. These results provide novel evidence of the contribution of landfill fires to urban PM<sub>2.5</sub> pollution and associated health risks, offering valuable insights for air quality management and public health protection in cities with similar environmental conditions.

Vol. 19, Article number: 28

Research Article

**Analysis of air quality based on national monitoring networks in the Republic of Korea, 2023 - annual trends in air quality over two decades in South Korea-**

Soyoung Kang, ChanJung An, Dayeong Lee, Dong-Hee Jung, Eunsun Jeong, Jinju Jeong, In-Ho Song, Hye Jung Shin, Seung-Ha Lee,

Hae-Jin Jung, Yong-Jae Lim\*, Jung Min Park, Jiwon Seong ..... <https://link.springer.com/article/10.1007/s44273-025-00073-0>**ABSTRACT**

In this study, to assess the long-term air quality status in South Korea, we analyzed the concentration and attainment rate of air quality standards for 8 pollutants such as SO<sub>2</sub>, NO<sub>2</sub>, CO, O<sub>3</sub>, PM<sub>10</sub>, PM<sub>2.5</sub>, Pb, and benzene. In 2023, the average concentrations were as follows: PM<sub>10</sub> 37 µg/m<sup>3</sup>, PM<sub>2.5</sub> 19 µg/m<sup>3</sup>, SO<sub>2</sub> 0.0025 ppm, NO<sub>2</sub> 0.0135 ppm, CO 0.39 ppm, O<sub>3</sub> 0.0327 ppm, Pb 0.01979 µg/m<sup>3</sup>, and benzene 0.64 µg/m<sup>3</sup>. Due to ongoing strict emission control policies, PM<sub>2.5</sub> and NO<sub>2</sub> levels have decreased by approximately 27% and 43%, respectively, compared to 2015. Other pollutants, including SO<sub>2</sub>, CO, PM<sub>10</sub>, Pb, and benzene, also showed significant reductions, ranging from 36% to 74%, over the

analyzed period. However, O<sub>3</sub> levels have shown a 73% increase since 1998. Primary pollutants have generally decreased in concentration with higher attainment rate for air quality standards, whereas PM<sub>2.5</sub>, a secondary pollutant, still exhibits a low attainment rate of less than 20% in 2023 despite concentration reductions. Likewise, low attainment rate coupled with rising O<sub>3</sub> levels indicate a need to focus on secondary pollutants in future air quality management policies. This study provides long-term observational data on air pollutants in South Korea, which can aid in understanding air quality across East Asia and help to make a direction ongoing air quality improvement policy.

Vol. 20, Article number: 1

Research Article

**Continuous observation of atmospheric speciated mercury at a site near the crater of Mt. Aso volcano**Kohji Marumoto\* ..... <https://link.springer.com/article/10.1007/s44273-025-00079-8>**ABSTRACT**

Volcanic and geothermal activities are one of the major emission sources of mercury (Hg), emitting 500 tons y<sup>-1</sup> into the atmosphere, and it is known that there are three main forms of Hg released to the atmosphere from these activities: gaseous elemental mercury (GEM), gaseous oxidized mercury (GOM), and particle-bound mercury (PBM). In this study, the concentrations of GEM, GOM and PBM<sub>2.5</sub> (PBM

in particles less than 2.5 µm) were continuously observed for 2 years at Sensuikyo Station, located 2.5 km northeast from Nakadake No. 1 Crater of Mt. Aso. The observed mean concentrations of GEM, GOM, and PBM<sub>2.5</sub> in the entire period were 1.64, 0.021 and 0.021 ng m<sup>-3</sup>, while maximum concentrations were 9.04, 2.45 and 3.20 ng m<sup>-3</sup>, respectively. The concentrations increased significantly when the volcanic activity was high and when the wind blew from the crater.

Under high volcanic activity, the mean concentrations of GEM, GOM and PBM<sub>2.5</sub> were 1.3, 4.1, and 15.3 times higher than those during calm conditions. Changes in GOM and PBM<sub>2.5</sub> concentrations between active and calm conditions were significantly higher than those of GEM. The amplitude of volcanic tremors is usually used as a reference indicator of the volcanic activity. GOM and PBM<sub>2.5</sub> concentrations

became higher before the volcanic tremor amplitude increased. However, the reliability of atmospheric GOM measurements in volcanic regions with high levels of acidic gases is still debatable. Therefore, PBM<sub>2.5</sub> concentrations can be used as one of the indicators to assess the activity of Mount Aso volcano.

#### 【和訳情報】

### 阿蘇火山火口付近における大気中水銀の形態別連続観測

丸本 幸治<sup>1</sup> (<sup>1</sup>国立水俣病総合研究センター)

火山・地熱活動は水銀 (Hg) の主要な放出源の一つであり、全球レベルで年間500トンのHgが大気中に放出されている。大気中に放出されるHgには主に3つの形態、ガス状金属水銀 (GEM)、ガス状酸化態水銀 (GOM)、粒子状水銀 (PBM) があることが知られている。本研究では、阿蘇山中岳第一火口から北東2.5 kmに位置する仙酔峡において、GEM、GOM、PBM<sub>2.5</sub> (粒径2.5 μm未満のPBM) の濃度を2年間にわたり連続観測した。全観測期間におけるGEM、GOM、PBM<sub>2.5</sub>の平均濃度はそれぞれ1.64、0.021、0.021 ng m<sup>-3</sup>であり、最大濃度はそれぞれ9.04、2.45、3.20 ng m<sup>-3</sup>を記録した。火山活動が活発な時期に火口方向からの風が卓越す

るときに濃度が顕著に上昇した。そのときのGEM、GOM、PBM<sub>2.5</sub>の平均濃度は、活動が静穏な状態と比較してそれぞれ1.3倍、4.1倍、15.3倍高かった。活動期と静穏期におけるGOMおよびPBM<sub>2.5</sub>の濃度変化は、GEMのそれよりも有意に大きかった。火山活動の指標として火山性微動の振幅が通常用いられるが、火山性微動の振幅が増大する前に、大気中のGOMおよびPBM<sub>2.5</sub>濃度が上昇することがあった。しかしながら、酸性ガス濃度が高い火山地域における大気中GOMの測定についてはその信頼性が議論されている。したがって、PBM<sub>2.5</sub>濃度が阿蘇火山の活動を評価する指標の一つとなる可能性がある。

## 支部だより

各支部のホームページもご覧ください。  
学会ホームページ (<https://www.jsae-net.org/>) にリンクがあります。

### 関東

#### 令和7年度関東支部 大気沈着部会講演会のお知らせ

主催：大気環境学会関東支部大気沈着部会  
共催：大気環境学会酸性雨分科会  
日時：令和8年3月19日(木) 15:00~16:30  
場所：オンライン開催  
演題：「長期多高度タワー観測とドローン統合観測による都市近郊森林BVOCの空間変動性評価とMEGANモデル検証」

講演者：市川 有二郎 氏(埼玉県環境科学国際センター)

参加費：無料

参加申込：3月17日(火)までに、下記URLからお申込みください。

<申込先>

<https://forms.office.com/r/dv96fTBSnC>



※アクセスできない方は、氏名、所属を明記の上、下記問い合わせ先までご連絡ください。

問い合わせ：大気沈着部会事務局 伴 聡美(日本環境衛生センター)

E-mail: [satomi\\_ban@jesc.or.jp](mailto:satomi_ban@jesc.or.jp)

#### 令和7年度関東支部総会・講演会・交流会のお知らせ

日程と会場を再掲いたします。総会議事および講演会の内容は、決まり次第関東支部HPおよび次報にてお知らせします。

日時：令和8年5月22日(金)

・総会：12:30~13:00

・講演会：13:00~16:30

・交流会：17:00~19:00

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎およびオンラインのハイブリッド開催

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/hiyoshi.html>

・総会・講演会：来往舎2F大会議室(現地定員50名予定)

・交流会：来往舎1Fファカルティラウンジ(立食・会費制)

問い合わせ：

関東支部事務局 米倉、城

〒347-0115 埼玉県加須市上種足914

埼玉県環境科学国際センター内

E-mail: [jsae.kanto@gmail.com](mailto:jsae.kanto@gmail.com)

FAX: 0480-70-2031

関東支部HP: <https://sites.google.com/view/jsaekanto>

### 近畿

#### 生体影響部会講演会のお知らせ

テーマ：「オゾンの植物影響」

日時：令和8年3月17日(火) 14:00~16:40(受付13:30から)

会場：大阪公立大学 I-site なんば

カンファレンスルーム C1

〒556-0012 大阪市浪速区敷津東2-1-41

<https://www.omu.ac.jp/bsite/access/>

形式：対面およびZoomによるハイブリッド開催  
プログラム：

1. 定永 靖宗(大阪公立大学)  
題目「オゾン生成速度の実測によるオゾンの大気中動態解明に向けたアプローチ(仮)」
2. 青野 光子(武庫川女子大学)  
題目「植物はオゾンにどう向き合うのか：応答と耐性のしくみ」
3. 伊豆田 猛(東京農工大学)  
題目「オゾンの植物影響と光化学オキシダントの環境基準の見直し」

参加費：無料

定員：対面 40名、オンライン100名(いずれも先着順)

参加申込：参加には事前登録が必要です。必ず事前申込をお願い致します。定員に達し次第、受付を終了いたします。

主催：大気環境学会近畿支部 生体影響部会

共催：大阪公立大学(予定)

参加申込：3月13日(金)までにGoogleフォーム

(<https://forms.gle/DQpECoxCiwGVYfvi8>)より、お申込みください。

問合せ先：余田 佳子(関西福祉科学大学)

[yoda@tamateyama.ac.jp](mailto:yoda@tamateyama.ac.jp)

## 分科会・研究会だより

各分科会・研究会のホームページもご覧ください。  
学会ホームページ (<https://www.jsae-net.org/>) にリンクがあります。

### 環境大気モニタリング分科会

#### 第58回研究会のお知らせ

環境大気モニタリング分科会では、「光化学オキシダント研究の最前線」をテーマに、第58回研究会を開催します。本研究会では環境省ご担当者による基準改正の解説と対策プランのご説明、さらに第一線でご活躍中の先生方による最新の研究動向や成果のご講演を予定しています。行政と研究の双方から総合的に議論する貴重な機会となります。会員以外の方も歓迎しますので関心のある方はぜひご参加ください。

日 時：2026年3月25日(水) 14:00～16:40

会 場：江東区文化センター 大研修室(東京都江東区東陽4-11-3) およびZoomによるハイブリッド開催  
(Zoomの接続情報は、後日お送りします)

代表者：星 純也(東京都環境科学研究所)

プログラム：

1. 微小粒子状物質・光化学オキシダント対策の最近の動向と課題

山田 克之 氏(環境省水・大気環境局)

2. 大気汚染予測システムVENUSによる光化学オキシダント予測  
森野 悠 氏(国立環境研究所)
3. リアルタイム質量分析計を用いた揮発性有機化合物の個別成分の網羅的かつ高時間分解能測定  
猪俣 敏 氏(国立環境研究所)
4. 実測によるオゾン光化学生成速度と生成感度の直接評価  
定永 靖宗 氏(大阪公立大学)

参加費：無料

参加申込：事前申込が必要です。下記Googleフォームからお申し込みください。研究会の詳細情報は、ご登録頂いたメールアドレスに送付します。

(<https://forms.gle/arapYxkcA3B5nhxR6>)



参加申し込み

問合先：賢持 省吾(東亜DKK) [s-kenmochi@toadkk.co.jp](mailto:s-kenmochi@toadkk.co.jp)

## 委員会だより

### 編集委員会

#### 研究論文の投稿のお願い

本誌への研究論文（原著論文、ノート、速報、技術調査報告）の投稿をお待ちしています。投稿された研究論文は、査読委員と編集委員会による審査を経て、採用されればJ-STAGE上で公開されます。研究成果を広く知ってもらえる貴重な機会ですので、積極的な投稿をお願いします。詳細は投稿規程と投稿の手引きをご覧ください。

#### 「研究室・企業紹介」の原稿募集のお知らせ

本誌では、会員の相互理解を深めるため、「研究室・企業紹介」のコーナーで、会員機関の研究室紹介を行っています。このコーナーの原稿を募集しますので、日頃の研究取り組みを情報発信したい会員の方、ぜひご投稿よろしくをお願いします。

投稿を希望される方は、大気環境学会誌編集事務局 (jsae-edit@je.bunken.co.jp) までご連絡ください。担当より執筆要領等の詳細をご案内いたします。

#### 会員へのお知らせの掲載について

学会活動以外の行事開催案内や研究資金公募など、会員に有益であると思われる情報を、テキスト形式でメールマガジンに掲載します。掲載料は1ページ10,000円（非会員は20,000円）とします。希望者は原稿を大気環境学会誌編集事務局 (jsae-edit@je.bunken.co.jp) にお送りください。編集委員会で掲載の可否を決定します。

#### J-STAGE への大気環境学会年会講演要旨集の掲載について

J-STAGE への大気環境学会年会講演要旨集の掲載を始めました。今後、過去の年会の講演要旨集の掲載を進めていきます。  
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/taikiabst/-char/ja>

### 論文賞選考委員会

#### 論文賞の選考対象について

論文賞選考委員会では、1年間に大気環境学会誌と Asian Journal of Atmospheric Environment (AJAE) に掲載された論文の中から、論文賞を選考しています。大気環境学会誌については、全ての研究論文（原著論文、ノート、速報、技術調査報告）を選考の対象とします。また、AJAEについては、大気環境学会の会員を責任著者（Corresponding Author）とする Research Article を選考の対象とします。選考対象論文の投稿をぜひよろしくお願いします。

 関 連 学 協 会 だ よ り **第43回空気清浄とコンタミネーションコントロール研究大会**

日程：2026年4月21日～22日

場所：早稲田大学国際会議場（東京都新宿区）

URL：<https://www.jaca-1963.or.jp/jp/event/第43回空気清浄とコンタミネーションコントロール.html>**第32回レーザーダ国際会議 (32nd International Laser Radar Conference)**

日程：2026年7月5日～10日

場所：広島国際会議場（広島県広島市）

URL：<https://smartconf.jp/content/ilrc32/>**第36回環境工学総合シンポジウム2026**

日程：2026年7月29日～31日

場所：工学院大学（東京都新宿区）

URL：<https://www.jsme.or.jp/env/symp/sympo-info2026/index.shtml>**第10回国際窒素会議 (N2026)**

日程：2026年11月2日～6日

場所：国立京都国際会館（京都府京都市）

URL：<https://n2026.org/>**第29回風工学シンポジウム**

日程：2026年12月2日～4日

場所：横浜国立大学（神奈川県横浜市）

## 賛助会員一覧（五十音順）

株式会社秋田県分析化学センター

川崎市環境局環境総合研究所

株式会社環境管理センター

紀本電子工業株式会社

柴田科学株式会社

株式会社数理計画

一般財団法人大気環境総合センター

東亜ディケーケー株式会社

東京ダイレック株式会社

東京都環境局環境改善部

日本カノマックス株式会社

一般財団法人日本環境衛生センター

東日本高速道路株式会社

富士電機株式会社 パワエレシステム インダストリー事業本部

## 「大気環境学会誌」編集委員

編集委員長	茶谷 聡	国立環境研究所		
副編集委員長	板野 泰之	大阪市立環境科学研究センター		
編集委員	井上 和也	産業技術総合研究所	澤田 寛子	農研機構
	猪股 弥生	金沢大学	鶴丸 央	東京都環境科学研究所
	浦西 克維	北九州市立大学	豊永 悟史	熊本県保健環境科学研究所
	奥村 智憲	大阪府立環境農林水産総合研究所	原 由香里	九州大学
	小野 浩己	電力中央研究所	樋口 能士	立命館大学
	柏倉 桐子	日本自動車研究所	藤井 佑介	大阪公立大学
	木戸 瑞佳	富山県環境科学センター	藪下 彰啓	愛知工科大学
	工藤 慎治	滋賀県立大学	山口 真弘	長崎大学
	熊谷 貴美代	群馬県衛生環境研究所	吉野 彩子	国立環境研究所
	栗林 正俊	長野県環境保全研究所	渡辺 幸一	富山県立大学
	坂本 陽介	国立環境研究所	和田 龍一	帝京科学大学
	定永 靖宗	大阪公立大学		

### 複写される方に

本誌(書)に掲載された著作物を複写したい方は、著作権者から複写権の委託をうけている次の団体から許諾を受けて下さい。

学術著作権協会

〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル

TEL: 03-3475-5618 FAX: 03-3475-5619